

靈驗譚と権化の思想

望 月 真

一、地蔵菩薩靈驗譚——六道能化——

宝物集卷三に「現当二世の利益、観音を仰ぎ奉りて、ゆめゆめ疑ひを成す事なかれ。念々に疑ひを成す事なかれとは如来の金言にあらざる。また地蔵菩薩は、我等衆生が深く頼み奉るべき菩薩なり」と見える。「朝観音夕薬師」という諺もあるが、平安朝の弥陀信仰の深化と共に地蔵菩薩への関心も高まった。すでに中国でも、隋唐時代に観音・弥勒・弥陀と並んで地蔵信仰が普及した。「五逆罪を造れども、常に地蔵尊を念すれば、諸の地獄に遊戯して、決定して代りて苦を受く」と云われるが、釈迦入滅後、弥勒菩薩が成道するまで衆生を教化し救済すべきことを付嘱された六道能化の菩薩である。

沙石集卷二の九に「菩薩代受苦の事」がある。菩薩の大慈悲心が衆生に代って地獄の責苦を受けて下さるといふ。卷二の五には「地蔵の看病し給ふ事」があり、「弥陀と地蔵と一体」といふ、「地蔵菩薩は、闍提の悲願を発し、大師の付嘱をうけ、無仏の導師として悪趣の利益を先とし給ふ事、諸の賢聖に勝れ給へり」とあり、更に次のように見える。

されば十論経には、「普賢・文殊・観音・弥勒等の恒沙の菩薩の所にて、百劫の間、念誦し、礼拝し、供養して、諸の所求を祈らんよりは、しかし、地蔵の所にして、一食の間念誦し、礼拝して、所

願を求めんには、久く大願を修して、勇猛精進なる事、諸菩薩にすぎたればなり」と説き給へり。

「闍提」は一闍提の略で、一切の衆生を済度するまでは成仏しないという悲願をおこされたのである。「大師」は釈迦の尊称。「恒沙」は恒河沙の略で、ガンジス河の砂のように数の多いことのとえである。そして「地蔵菩薩は慈悲深重の故に、浄土にも居し給はず、有縁尽きざる故に、入滅をも唱へ給はず。只悪趣を以て栖とし、罪人を以て友とす」此の菩薩は機根の熟するをもまたず、臨終の暮ともいはず、鎮に六趣の衢に立ち、且暮に回生の族に加はりて、縁なき衆生すら猶助け給ふ。「地蔵は六趣四生の苦を助け給ふ。諸仏菩薩の利生に勝れたり」と見える。「六趣」は六道で、「四生」は一切の生物の意である。

卷四の一には、「地蔵は弥陀・観音と同体なり」「弥陀は大日の右肩・観音は臂、地蔵は指なり」とある。阿弥陀とその脇士である観音・勢至の二菩薩を阿弥陀三尊という。三尊来迎図もあるが、観音と地蔵を配した三尊像もある。なお阿弥陀仏と、その脇士である観音・勢至・地蔵・竜樹の四菩薩を阿弥陀五仏といい、これを図に表わした阿弥陀五尊曼荼羅がある。

延命地蔵経には地蔵尊を信仰すれば十福が授けられるという。女人・泰産・身根具足・衆病疾除・寿命長遠・聰明智慧・財宝盈益・衆人愛敬・穀物成熟・神明加護・証大菩提の十種の福德である。諺に「仏の

顔も三度」というが、「地藏の顔も三度」ともいう。地藏十論経には「安忍不動なること猶大地の如く、静慮深密なること猶秘蔵の如し」とあり、この大地の「地」と、秘蔵の「蔵」から「地藏」と名づけられたとある。

地藏信仰は鎌倉以後は庶民の間に普及し、地神（道祖神）・土公神とも結びつき、また延命地藏・子安地藏・子育て地藏・水子地藏も生まれた。地方の道はたなどに六体の地藏（六地藏）がよく見られる。六体の地藏尊を安置した寺で、特に京都伏見の大善寺が知られ、これらを巡拝するのが六地藏詣である。地藏の石像は村境に三界万霊塔などと一緒立っている。境を守る塞の神（道祖神・道陸神）信仰に結びついたものであろう。

日本歌謡集成（高野辰之編・春秋社版）巻四の第六順礼歌に山城国六道地藏尊六所御詠歌がある。第一番 六地藏 伏見城山東に

浮き沈み、六地を巡る、六地藏、
大悲の袖の、乾く暇なし。

と出ている。また第七補遺に「道陸神」「六地藏」の項がある。

一、婦命頂礼道祖神、宿世結びの神なれば、諸国巡りて辻に立ちよる。南無阿弥陀。

一、婦命頂礼六地藏。何とて庭に御立ちある。衆生を救はん其の為に、庭に立ちよる。南無阿弥陀。

なお地藏和讃には

婦命頂礼地藏尊。一日地藏の名号を、唱ふる功德多くして、俱胝劫のそのうちに、あらゆる菩薩の名号を唱へしよりも優れりと、十輪経に説き給ふ、大無地藏大菩薩大無地藏大菩薩。

「俱胝」は梵語 koti で、拘胝・俱泥とも書き、インドの数の名で、億と訳される。また千万ともいい、無量の数である。「劫」も梵語 kalpa で劫波の略、刹那に対しきわめて長い時間である。億劫は一劫の億倍で、いずれも千万無量を意味する。親鸞の弥陀和讃には「百千俱胝の劫をへて」と見える。次に

婦命頂礼地藏尊。人間百年いみじきも、五欲の楽は厭き足らず、無明の酒に深く酔ひ、末長き世と覚えども、いかで無常を免れん
：地藏菩薩は慈悲深く二世の導師と願立てし、迷ふ我が身をそのままに仏の国へ連れ給ふ。南無地藏大菩薩 南無地藏大菩薩。

婦命頂礼地藏尊。地藏の名号唱ふれば、一念称名徳高く宿殃重罪消滅し、現世安穩快樂にて、命も長く病なし。水火盜賊横死まで、皆々除き守護なさる。南無地藏大菩薩。南無地藏大菩薩。

「婦命」は南無、「頂礼」は古代インドの最敬礼で、長者の前にひれ伏し、その足を額にあてて礼拝する意である。

梁塵秘抄卷二の雑に

婦命頂礼大権現、今日より我等を捨てずして、生々世々に擁護して、阿耨菩提と成し給へ。

と出ている。「阿耨菩提」は阿耨多羅三藐三菩提の略で、無上正等正覚の意、あまねく一切の真理を知る無上の仏の知恵である。

なお「地藏と閻魔は一」というが、慈悲深い地藏菩薩に対し、閻魔王は怒りを具現するが、どちらも阿弥陀の分身であるというのである。すでに日本霊異記下に「閻魔王、奇しき表を示し、人に勧めて善を修せしむる縁第九」がある。

我を知らむと欲はば、我は閻羅王、汝が国に地藏菩薩と称ふ、是れなり。

この閻羅王は閻魔王で、もとインドのバラモンから入ってきたが、地獄の主となり、亡者の生前の善悪を審判するという。恐ろしい忿怒の相をなすが地藏菩薩の化身ともいわれる。密教では閻魔王を本尊とし、免罪・安産のために閻魔天供法を修するが、陰曆一月十六日と七月十六日の閻魔詣も注意したい。

宝物集卷三には「地藏菩薩は、我等衆生が深く頼み奉るべき菩薩なり：閻魔王と成りて罪人を扶け、或は梵天帝釈と成りて、悪業をならめ給ふ」とあり「衆生の苦患に代りて、地獄に落ち給ふ」のである。まさに大悲代受苦であり、沙石集卷一の五には「地獄は大日の柔

軟の方便の至極、不動は強剛の方便の至極といへり」と見える。真言密教の不動法は、不動明王を本尊として無病息災を祈願するのである。観音・薬師・弥陀・地藏諸菩薩を信仰し、一方では閻魔王や不動明王を本尊とする行法が存することに留意したい。

今昔物語の卷十七は、その大半が地藏菩薩の靈驗譚で占められている。沙石集卷二の五の「地藏の看病し給ふ事」には「若き僧の、美目形うつくしきが、えもいはず看病するあり」と見え、地藏の化身によって危篤の病人が助かる話がある。地藏像のように丸く美しい顔を地藏顔・地藏頭・地藏眉などというが、古典にも眉目秀麗の若い僧として示現する場合が多い。そして観音や弥陀の場合と同じく、要は地藏菩薩に帰依し、ひたすら念じ奉ることである。この時靈驗あらたかである。

卷十七の四話は「地藏菩薩を念ずるに依り」、「主に殺さるる難を廻れたる語」である。次の五話は「夢の告げに依りて泥中より地藏を掘り出せる語」である。陸奥の前司、平孝義の家に、藤二という男が仕えていた。この地藏は現在重要文化財に指示されている。第七話は近江の郡にある寺の住職蔵明が「慈悲忍辱にして、施の心広かりけり」とあり、極貧にもめげず、只地藏の名号を念じ、世の人から地藏聖と名付けられたという。この僧の夢のお告げに

汝速かに幡磨の国に行きて、其の国の東北に一の深き山有り、其の山の頂に一の勝地有り、其の所に住すべし。

と。そこでその地に庵室をむすび、動行に余念がなかった。やがて夢に「一人の小さき僧出で来たる、其の形端正なり、左の手に宝珠を捧げ」て蔵明に近づき、お告げがあった。

汝、宿業拙くして今生貧しき身と有り。而るに、懃に我を念ず。我此の宝珠を汝に与へむ。此れを以て、汝が施の心を遂ぐべし。

と。夢の中で「此れ、我が本尊・地藏の来り給へるなり」と思い、地にひざまずいて宝珠を拝受した。これよりいよいよ地藏菩薩を念じ、諸国からの参詣も多くなり、遂に堂を建立し、等身の地藏菩薩の像を

安置し、清水寺と言った。これが現在西国三十三所の第二十五番で、新清水と称せられる。

第九話は「僧浄源、地藏を祈りて絹を老母に与へたる語」である。比叡山の横川の僧浄源は、顕密の法文を学し、道心堅固で一意専心仏法を修行した。不運にも飢渴のため餓死者が続出した。浄源の老母と妹は京の家におり、口にする物もなく死を待つ身だった。時に浄源は「地藏菩薩の本誓を深く憑み、密に其の法を行なひ」「老いたる母を助け給へ」と祈った。その満願の夜、京の老母の夢に、「一人の小さき僧の形端正なる、手に美しき絹三疋を捧げて来た」って、老母に

此の絹は上の中の上品なり、横川の供奉の御房の遣はず所なり。速かに此れを米に交易して、御要に充てらるべし。

と言って絹を得させたという。「疋」は反物二反を単位として数える語で、昔は四丈(約二メートル)、のちには鯨尺で五丈六尺(約二メートル)をいった。

夜が明けると現にその傍に、美しい絹が三疋あった。これを見た人はこの奇異な事相に空を仰いで唯感嘆するのみだった。絹三疋は米三十石にも値した。浄源は涙を流し、地藏菩薩の本願の決して無根でなかったことが感に耐えず、早速次の返書を送った。

我老いたる母の餓を助けむが為に、地藏の誓ひを憑みて其の法を行ひき。而るに、夢に絹を得給ひけむ夜、彼の行法一七日に満ずる日に当たれり。此れ偏に、地藏菩薩の利益ならむと。

老母はこれを聞いて、地藏菩薩の利生を景仰すると共に、浄源の深い孝養心に感悦した。

これに続く靈驗譚にも、夢に「一人の小さき僧有り、其の形端正なり」「年十四、五歳ばかりの小さき僧の端正なる来たり」などと出てくる。二十六話は「亀を買ひて放ちし男、地藏の助けに依りて活るを得たる語」である。

昔、近江の国に貧しい男がいた。其の妻は常に人に雇われて、機を織ることを業とした。妻は丹精して手作りの布一段を織り、これを夫

に渡し、箭橋の港には海人が多く、魚をとって商うと聞いているから、この布をもって行つて魚を買い、それを稲・粳などに替えて、今年一二段の田を作つて生活の資にしましようと言つた。夫は妻の言に従つて、布を持ち箭橋に出かけ海人に魚を所望した。しかし網に魚はかからず、大きな亀が一匹引きあげられた。海人がこの亀を殺そうとした時、布をもつた男が見て憐憫の情をもよおし、この布で亀を買おうと言つた。海人は喜んで布を取り、亀を男に渡した。男は亀を買い取つて、亀に向かつて、自分は家が貧しいが、布と交換に魚を買わないで、お前の命を助けるのだと言ひ聞かせて海に放つてやつた。こうして男は何も手にせず帰宅した。待ちわびていた妻はこれを知つて大変怒り、夫を責めそして恥ずかしめた。その後まもなく夫は病死したが、葬つてから三日たつて生きかへつた。夫が妻にいうには、自分が死んだ時官人に捕えられ、連行された。その門の前の庭を見ると多くの人が縛られ伏つていた。内心ひどく恐怖に駆られたが、その中に「一人の端嚴なる小さき僧」が出てきて語つた。

此れ、地藏菩薩なり。此の男は、我が為に恩を施せる者なり。我有情を利益せむが為に、彼の近江国の江の辺にして、大きな亀の身として有りし。海人の為に引き捕へられて、命を殺されむとせしに、此の男慈しみの心を発して、亀を買取りて命を助けて、江の中に放ちてき。然れば速かに、此の男免し放つべし。

官人はこれを聞いて男を放免した。其の後この僧は男に本国に帰る道を教えたが、見ると二十余りの美麗な女人が縛られ、二人の鬼が前後について追つてくるのだつた。男はお前はどここの誰かと尋ねたところ、女は泣きながら「我は筑前の国、宗方の郡の官首の娘なり、俄に父母を離れて、独り暗き道に入りて、鬼に打ち追はれて来たるなり」と答えた。男はこれを聞くやひどく悲しみ僧に哀願した。

我は年既に半ばを過ぎて、残りの命幾に非ず、此の女は年未だ幼くして、行末遙かなり。然れば、我れを此の女に替へて女を免し遣はせ。

と。彼の僧はこれを聞いて「汝が心、極めて慈悲あり。我が身に替へて人を助くる事、此れ有り難き事なり。此れに依りて、共に請ひ免さむ」といわれた。そして鬼に請うて共に放免された。女は泣いて男と契りを成して別れた。男は妻に一切の真相を語つた。

その後、男は冥途で見た女を尋ねようと思ひ、筑紫に行つた。彼の女が話したように筑前宗方の官首の家を尋ねると、本當に若い娘がいた。人々はその娘が病死して二三日たつて生きかへつたと語つた。男はその娘に冥途で約束した事を云つて来意を告げた。娘は戸惑ひしたがお互いに冥途で見たのと全く同じで、涙に暮れた。親しく語り男は本国に帰り、共に道心を起して、地藏菩薩にお仕えしたと語り伝えているという。

なお説経僧祥運が地藏の助けに依り苦を免れたという三十一話や、上総の守時重が法華経を書写して地藏の助けを蒙つた三十二話には和歌があり「人を利益せむが為には、地藏菩薩も和歌を読み給ふなりけり」とある。

江戸初期、三河の鈴木正三は反古集二巻を書いているが、その下巻の「与或士」に

京中辻々の地藏祭、去年七月より童部共、見事に致し候。

とある。近松の女殺油地獄には「地獄の地藏」と出ている。「地獄で仏に会つたよう」な九死に一生を得た思ひであらう。

陰曆七月二十四日は、地藏の縁日で、季語にも地藏盆・地藏会・地藏参などがある。

蕪村の「地藏会や近道を行く祭り客」や、高浜虚子の「地藏会や線香燃ゆる草の中」もある。六道で衆生の苦を救うという六地藏の信仰も篤く、京都では盆の二十四日に、山科・伏見・鳥羽・太秦など六か所の地藏に詣るのを六地藏詣と言う。庶民信仰の根は深い。

日本古来の神々を仏・菩薩の垂迹であるとする権現（権化）の思想は、特に中世文学に大きく反映し、神仏の不思議な靈驗と共に注目すべきものがあると思う。

二、文殊と普賢——智と行——

「菊の香や奈良には古き仏達」——芭蕉は古都奈良でこのゆかしい一句を詠んだ。亀井勝一郎氏は「大和古寺風物誌」で、上代から今日まで最も普及した像として、薬師如来と地藏菩薩と観音菩薩をあげられ、信仰の三つの型を示すものとされている。「病の不安に対しては薬師如来が、死後の不安に対しては地藏菩薩が礼拝の対象となったが、観音菩薩の場合はほとんど限定はない。人生のあらゆる不安に应じてあらわれたといつてよからう」といわれている。枕草子二一〇段にはこれに釈迦仏と、弥勒、不動尊、そして文殊と普賢をあげている。

文殊と普賢は諸菩薩の之首として信仰され、釈迦如来の脇侍として左右に配されている。文殊の知恵、普賢の行法と云われるのも、真理を悟り、それを行なうことが仏教の要諦であることを示す。法華経は迹門と本門に分けられ、迹門の教えの中心は「仏の知恵」であり、本門の教えは「仏の慈悲」について説かれている。二十八品の序品の後半は文殊と弥勒の問答であり、最後の普賢菩薩勸発品では法華経護持の白象に乗った普賢菩薩が出現され、更に結経である観普賢経が添えられている。普賢菩薩は法華経の教えの総しめくりとして登場するのである。

文殊菩薩は獅子に乗り、右手に経巻、左手に蓮華を持ち、この宇宙の真理を悟り世俗に超然とした覚者の風がある。それは百獣の王で、恐れを知らず、何物にも支配されない獅子に象徴される。これに対して象は穩健であるが熟慮断行型の実践家を彷彿させる。白象は仏の使とされ、その六本の牙は六波羅蜜を表わしているといわれる。

文殊と普賢の智と行、それに弥勒菩薩の慈悲は法華経の教えの極致とも見られる。「三人寄れば文殊の智恵」、また「梨特が愚痴も文殊の智恵」ともいう。仏法の前には智者も愚者も差別なく、ひとしく仏果を得るのである。「文殊も智恵のこぼれ」というのも、「孔子の倒れ」

「弘法も筆の誤り」で、どんな偉い人にも失策はあるとのたとえである。日本靈異記上に「妙徳菩薩とは、文殊師利菩薩なり」とあり、百座法談（法華修法百座聞書抄）には「文殊菩薩の諸仏の智母とましまし」と見える。「開目抄」（日蓮）にも「文殊は釈尊九代の御師と申す云々」とあり、阿闍世王経には「文殊師利は是れ菩薩の父母なり」と見える。中国華嚴宗の祖・杜順は、文殊師利菩薩が釈迦滅後、中国に生まれ、大乘仏教を弘通したとされ、文殊の化身と言われる。

日本ではすでに文殊・普賢の信仰が行われ天長十年（八三三）に始まった文殊会は、七月八日京都の東寺と西寺で、文殊菩薩をまつり、文殊涅槃経により貧者に物を施した。西寺は天福元年（一一三三）火災にかかり、金堂と講堂の址を止めているに過ぎないが、東寺は今も昔の面影を残している。文殊に関する靈驗譚は今昔物語集にも見える。

卷十一の二話に「行基菩薩、仏法を学びて人を導ける語」がある。行基が「慈悲の心深くして、人を哀れぶ事仏の如く、諸々の国々修行して、本の国にかへる」道で、「池の辺を通るに人多く集りて魚を捕り食ふ」場面に出くわし、若者が面白半分魚の膽をすすめるので召し上った。その直後口から吐き出されるので、見るとそれは膽が小さい魚になって皆、池に入るのであった。これを見て若者は恐縮し、この上なく尊い聖人さまとは知らず、軽率なことをしたことを謝罪した。時の天皇は行基に敬意を表し帰依され、大僧正に任ぜられた。また行基は畿内四十九所の寺を巡拝し、道を造り橋を渡し、文殊菩薩の化身として語り伝えられた。

平安後期、延久四年（一〇七八）に宋に渡った成尋阿闍梨は五台山の文殊菩薩の跡を尋ねるのが宿願であった。華嚴経に文殊は東方清涼山に住むと説かれているため、中国では五台山（清凉寺）、日本では大和の葛城山が靈地とされた。成尋阿闍梨母集にも「唐に五台山といふところに、文殊のおはしましけるあとのゆかしく拜まほしくはべるを云々」と見える。五台山は山西省五台県の北方にある山で、清凉山

ともいい、文殊菩薩示現の霊場と称され、謡曲の「九世戸」も神代の昔、天の橋立が造られた時、天台山の文殊菩薩を勧請したことにほじまる。「さても丹後の国九世の戸は神代の古跡にて、忝くも天竺五台山の文殊を勧請の地なり」と、その縁起が説かれ、「かたじけなくも天神七代地神二代の御神、この国に天降り、ここにて天竺五台山の、文殊を勧請し給」い、「末世の衆生済度の為に、霊像を勧請し給」という。吉田東伍博士の大日本地名辞書に丹後国与謝郡の智恩寺がある。

切戸に在り、文殊堂とも云ふ。創建未詳…本尊師利は古来霊仏と称し、其縁起あり、本堂、多宝塔、無相堂（地藏を置く）等あり、天橋立の南方なる岸頭に建ち、遙かに成相寺に對し以て画中の景物を添ふ。

なお東北米沢の亀岡にある文殊堂は米沢文殊と云われ、地方屈指の霊場とされる。また大和桜井市阿部の文殊堂も寺伝によれば大化中の創立とされ、寺域に古墳多く一帯を文殊ヶ丘という。以上日本三代文殊と称される。

今昔物語卷十七の三十六話に「文殊、行基と生れて女人の悪を見給へる語」があり、ここにも「今は昔、行基菩薩は文殊の化身に在ます」「誠に此れ、仏の化身に在ましけり」と見える。三十八話は「律師清範文殊の化身なることを知る語」である。清範は、山階寺の僧で、清水の別当であり、「心に智り深くして、人を哀れぶ事仏の如し」という。特に説経にすぐれ、諸所で説法して道心を発させた。その時に寂照という僧がいた。僧名は大江の定基と云い、朝廷に仕えていたが菩提心を発して出家したのである。長保四年（一〇〇二）三月十五日入上状して、宋の五台山を巡礼せんことを願ひ、翌年八月二十五日入宋、長元七年（一〇三四）杭州で寂した。この入道寂照は、在俗の時から清範律師と懇意であり、律師は念珠を寂照に与えた。その後、律師がなくなり、数年経過してから寂照は震旦（中国）に渡った。その時彼の念珠を持って、中国の天子の許に参ると、四、五歳ほどの皇子が

とんで出てきた。寂照を見て其の念珠を、まだなくさず所持してしましたねと、日本語で話した。寂照はこれを聞いて、奇異なことであると思つて、まあ何をおっしゃるのですかと言つた。皇子は今までなくさず持っていた念珠は、私があげたものであると云われた。その時寂照は思つた。自分が持っていた念珠は、律師からいただいたものであるから、この皇子は律師が生まれ変られたのだらうと。それにしても一体どうしてここにいらつしやるのですかと尋ねると、皇子は、この国に済度すべきものたちがいるから、このようにして参つたのであると答えて、中へ入られてしまった。

寂照は、世間の人が律師を文殊菩薩の化身であると云つたが、それは説経をよくされ、人の道心をおこさせるからだらうと思つていたが、これは本当に文殊の化身でいらつしやるのだと思つてつけても、感無量だつた。そして皇子が入られた方に向かつて礼拝した。これは律師と共に中国へ行った人が帰朝されて語られたのを聞き伝えたという。

文殊涅槃経に「もし衆生ありて、文殊師利の名を聞かんに、十二億劫生死の罪を除却せん。もし礼拝供養する者は、生々の処、恒に諸仏の家に生れん」とある。薬師如来が医薬の神として、馬頭観音が馬の守護神として崇拜されるように、文殊菩薩が子供の知能の増進のために信仰され、講組織も作られた民間習俗は根強いものがある。西鶴織留五には「丹後の国、切戸の文殊堂に金童子といへる脇立あり」と見えるが、文殊菩薩の使者である文殊八大童子や文殊五使者もいる。琉球神道記を参照すると琉球の諸寺諸山の本尊仏をあげ、竜福寺という文殊師利菩薩道場もある。

文殊菩薩は顯教、密教ともに諸経に広く説かれるが、釈迦の右脇に侍する普賢菩薩は遍吉とも訳され、理・行の徳をつかさどる。普賢延命菩薩は寿命延命を祈る時の対象とされる本尊である。空海の性靈集に「池中の円月を見ては普賢の鏡智を知り、空裏の慧日を仰いで遍智の我に在ることを覚る」とあるが、「鏡智」は、普賢菩薩がすべて

のものを照らす無上甚深の知恵で、大円鏡智をいう。「遍智」は四諦の理法を知るさとり智慧である。栄花物語の「玉の台」には、「かの往生要集の文を思ひ出づ：一実の道を聞きて、普賢の願海に入る」とあり、枕草子二〇九段には

経は法華経さらなり。普賢十願。千手経、随求経、金剛般若。藥師経、仁王経の下巻。

と見える。随求経は随求陀羅尼経であるが、普賢十願は、華嚴経の普賢行願品に説く十大願をさし、普賢の十行願ともいう。また普賢菩薩の願の廣大無辺なことを海にたとえて、往生要集では「普賢の願海に入る」と云ったのである。そして一切衆生が本来具有している清浄な悟りの心を、普賢大菩提心という。また普賢十羅刹女図に示されるように法華経の行者を守護すると説かれる。

普賢菩薩のこの偉大なる行願は、観普賢菩薩行法経に余す所なく示現されている。その真意は懺悔することであり、法華経の結びとして必ず読誦すべきものとされ、懺悔経とも呼ばれる。

若し懺悔せんと欲せば 端坐して実相を思へ 衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す

という聖句の中に仏教の神髄が包括される。

方丈記に「障子をへだてて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢をかき」とあり、俊成の長秋詠藻下の釈教歌では、普賢経の「衆罪如霜露 慧日能消除」の心を次のように詠んでいる。

露しもとむすべの罪の悔しさを

思ひとくこそあさひなりけれ

今昔物語卷十七の三十九話は「西の石蔵の仙久普賢の化身なること知れる語」である。京の西山に西の石蔵という山寺あり、そこに仙久という持経者が住んでいた。法華経を日夜読誦して少しも怠る事なく、常に法文を学し、道心あつく、慈悲心が深かった。専ら極楽往生を願ひ、念仏三昧に明け暮れた。このように熱心に勤行する程に、世の人々はもし普賢菩薩を見奉ろうと思う人がいるならば、仙久聖人を

見るべきである。普賢菩薩の化身である。ひたすらお近づきしようとして、夢に見るのであった。この夢の告げを聞きついで、都からも田舎からも此の聖人に結縁したい為に尋ねてくる人が多かった。こうして聖人は年を重ね、法華読誦の功により臨終の時も心乱れず、読経して入定された。これを聞く人々は皆いよいよ信心が深くなったという。

四十話は近江の今勝寺という山寺の光空という法華経の持経者が普賢の助けにより命を存えた靈驗譚である。この僧も日夜法華経を読誦し怠ることなく、「心に慈悲有りて、人を哀れぶ心深し」という。四十一話も僧貞遠が普賢の助けに依り難を遁れたことである。比叡山に登り出家し、師について法華経を学し、夜を日に継いで読誦する間に全部暗唱するに至ったという。この三昧境の中で夜の夢に、白象に乗った普賢菩薩が出現され、お告げがあり、靈驗あらたかなものがあつた。

柳田国男氏の「女性と民間伝承」の「歌舞の菩薩」に、書写の性空上人が、室の津の遊君を尋ねて、生身の普賢菩薩を拝んだという話がある。そしてこの上人は「なまめかしい女たちの生活から、清い仏のお姿を見出そうとした聖者」として知られていたと云われる。

新古今集卷十の旅の部に「天王寺へまうで侍りしに、にはかに雨ふりければ、江口にやどをかりけるに、かし侍らざりければよみ侍りける」と題する西行の歌と、遊女妙の「かへし」の歌があり、この贈答歌は謡曲「江口」に引用されている。撰津の国江口の里。積塔のある川岸の秋の夕暮れである。

さてはいにしへの江口の君の跡なりけり：げにや西行法師一夜の宿を借りけるに、主の心なかりければ、世の中を厭ふまでこそ難からめ、飯の宿りを惜しむ君かなと詠じけんも、この人の宿りなりけり、あら面白の詠歌やな。

ワキ(旅の僧)の詞である。そこにシテ(江口の遊女の亡霊)が現われ、本性を告げて消える。アイ(里の男)がその女性が実は普賢菩薩の化身であることを物語る。

さればこそこれはこの程も尊い人の夢にも昔の江口の長、川舟に

て、鼓唱歌にて遊び給ふが、のちには普賢菩薩となつて、天に上がり給ふと夢にも見、または幻にも月夜などには見え給ふと仰せられ候ふぞ昔の江口の長、舟遊びにておん見え候ふべきぞ。待ちてご覽候へ、まことは昔の江口の長は普賢菩薩の顯現とこそ申し伝へ候へ。

遊女の境遇からくる罪業観が、やがて無常観へと移行する。「思へば仮の宿、思へば仮の宿に、心留むな」といったが、もうこれでお別れして帰ります、というや否や「普賢、菩薩と現はれ、舟は白象となりつつ、光も共に白袴の、白雲にうち乗りて、西の空に行き給ふ」と大詰めになる。

近世の江口の里の跡には、西行と江口の君の木像が安置され、寺の名を普賢院と称し、名木の西行桜もあつた。俳句の季語に西行桜と共に普賢象桜もある。近世の西山宗因に

更にまた法の花なれ普賢象
の一句がある。

平安朝の浄土教の発展に伴い、法華経信仰も盛んになり、特に普賢菩薩像は当時の女性に崇拜され、繊細で優美な画像を生んだ。なお遊女が普賢菩薩の化身であるという中世の伝説から、この菩薩が遊女をさすようになった。「文殊でも迷ふ普賢の揚屋入」という句もある。揚屋入は遊女が遊女屋から揚屋に行くことで、盛装し、若衆・禿等を従え、華美な行列で練り歩いたのである。

中国では「智は円ならんことを欲し、行は方ならんことを欲す」(淮南子)というが、法華玄義の卷三下には「智目行足、清涼池に到る」と見える。文殊の智慧の目と、普賢の行法の足が兼ねそなわって極楽浄土に達することができるのである。「智は行の本」と云うが、般若の智に即した「信を以て慧に代」うべきものと領解したい。

唐の憲宗時代に天台山の近くに寒山と拾得が住み、奇行が多く、共に独特の詩を作り、「寒山詩」に収められている。寒山と拾得はそれぞれ文殊と普賢の化身とされ、画題にもなる。寒山は経巻を披き、拾

得は箒を持つ図が多い。坪内逍遙の舞踊劇で明治四十四年初演の「寒山拾得」があるが、森鷗外にも同名の短篇があり、大正五年雑誌「新小説」に発表された。鷗外の歴史小説として注目すべきものあり、作者の人生観の一端もうかがわれ、「寒山拾得縁起」の一文も草している。

霊験譚と権化の思想は中世文学に大きい意味をもつもので、この観点から謡曲を中心に更に考察を進めたい念願である。

〔付記〕 寒山拾得はすでに沙石集にも登場するが、五山の僧天岸慧広(武蔵)の出で、十三歳の時、建長寺で剃髪、四十九歳で入元。建武二年寂の「東帰集」に「国清寺」と題する五言詩がある。

なお安永六年豊後の竹田村に生まれ、上田秋成や頼山陽とも親交のあつた田能村竹田は詩画三昧の風流人で、その著「山中人饒舌」にも寒山と国清寺の豊干が出てくる。寒山・拾得にその師豊干禪師と虎を加えた四睡図は古来禅画として知られる。

また芭蕉の虚栗跋にも「李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を喫る」などと見える。寒山は李白・杜甫・白楽天・黄山谷等と共に芭蕉が最も影響を受けた詩僧である。